OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	論語の朱子學的理解
Author(s)	木南, 卓一
Citation	懐徳. 1957, 28, p. 21-42
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90310
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

論語の朱子學的理解

木南卓一

一

論語は孔子の人格・精神に深く觸發された弟子達によつて傳へられた孔子の言行を論撰したものであるが、その編述は十分に順序づけられてはをらず、寧ろ斷片的といふべきものである。然しこの事は編者にとつて已むを得ぬことであり、却つて適切なやり方であつたとも言ひ得る點がある。孔子は元來「述べて作らず、信じて古を好み」（述而篇）、已むなく詩書を刪定した。孟子も「聖の時なる者」（萬章篇下）と贊した如く、孔子はその時その場の實踐に最善を盡した。而して顏淵が喟然として「之を仰げば彌々高く、之を鑽れば彌々堅し。之を瞻て前に在りとせば忽焉として後に在り云々」（子罕篇）と歎じたのによつて察し得る如く、孔子の人格・精神を全的に捉へることは弟子達には容易ではなかつた。これが孔子の言行錄が斷片的とならざるを得ず、その編述も順序づけ難い理由であらう。然し論語を眞に理解し、孔子の人格・精神を捉へんとすることは、個々斷片的な言行を統一的にみること、その言行を生み出した根源的なものを捉へることでなければならない。ここに論語理解の困難さがあるのであつて、例へば論語の中から類似の言葉を集め、分析し、組織したとしても、それで孔子の眞意を把握し得たとは言へない。弟子達が同じく孝を問ひ、仁を問うても、孔子の答は夫々に異つてゐる。その一々の問に對して已む能はざる勢を以て露現してゐる孔子の眞精神は、一々の答を超えた內面に沈潛してゆくことによつて捉へ得るのであつて、右の分析・組織はこの沈潛あつてはじめて有意義なのである。これに就いては朱子も、程子や張南軒が孔子・孟子の仁を言ふ所を拔き出して、仁の何たるかを學ばんとしたのに對し、一應はその意義を認めつつも、直接仁を言はぬ箇處にも仁の意は大いにあるし、又そういふ性急な理解の仕方そのものに問題が

あると言つてゐる（文集三十一答張敬夫・語類一一八）。然るに孔子の人格の根源に觸れるならば、孔子の斷片的な言行のすべてに孔子の眞精神が活き活きと露現してゐる事を知り得るであらう。活きた人格・精神はその時その場の具體的な實行に專一でありつつ常に一貫したものである。かかる人格・精神は深く客觀的のもの、自他一如のものと言ふべく、ここに孔子の內面性と學ぶ者の內面性との無礙なる感應道交が行はれるのである。而して朱子學はこの樣な理解の上に立つものなのである。朱子は言ふ、

凡そ論語を看るは但文字を理會せんと欲するにあらず、須らく聖賢の氣象を識り得んことを要す（公冶長篇、顏淵季路侍章の集註）。

聖賢の氣象を識るは聖賢の人格に觸れ、內面的な感應を得る所以であるが、更に朱子學は性理の學としてかかる感應・感得に哲學的省察（體認）を加へて、孔子の人格・精神を根源的に明確に把握せんとするもので、これは上述の人格・精神の深き客觀性・自他共通一如性よりする必然と言ひ得よう。而して朱子自身、論語集註の名の示す如く多くの先人の說に導かれて論語を解釋し、就中孟子・程子に負ふ所が多く（詳しくは後述）、自分の論語の注解は孟子・程子の義疏であるとさへ言つてゐる（文集六十一答歐陽希逈書）。朱子は先人の哲學的省察を集大成した人であつた。

然るに朱子學に對抗して獨創的な論語解釋を下した人に伊藤仁齋がある。仁齋は孟子が論語の眞意を最もよく闡明したものと看て、孟子の說く內面性に沈潛し、朱子學とは違つた情意的な體認を得て、論語に深き解釋を下したのである。孔子を深く信じ、篤く學び修めた君子人であり、更には論語・孟子間の字義的連關を實證的に研究するといふ聰明な方法を創めた仁齋の說によつて、我々は朱子の解釋とは違つた論語の理解を得るのである。仁齋學の出現は朱子學的な哲學的省察を加へる限りやむを得ぬものとも思はれる。哲學的省察は全的な體認であるが、一面哲學する人自身の立場を反映しつつ、現實には偏倚を免れない。朱子學でも仁齋學にて主張する如き點は論じてゐるが、ただそれを根本主意としないのである。かくて仁齋學は朱子學を補つたとも言ふべく、兩者を併せて我々は論語を豐かに理解し得るのであらう。以上の事は論語の哲學的解釋に客觀的必然性なし言ふのではなく、論語の眞精神の豐富なる發展・展開を物語るものと言ふべきであらう。

なほ論語をその思想史的背景を考慮して理解することも有力な途である。孔子が理想とした周代の詩書禮樂の

世界、孔子が現實に生きた春秋時代を考へ、それを基盤にしつつもそれを超えて孔子が唱へ出した仁・德・道・學等を考へるならば、孔子の人格・精神が如何なる意味にて勝れてゐたかを知り得て、論語の思想史的意義と共にその古典的意義も察し得よう。而してこの様な理解は朱子學的な理解と相反するものではない。却つてその時代の精神を母胎としつつそれを超えて發揮された孔子の人格・精神は朱子學的考察の對象となるものである。否、寧ろ朱子學的考察によつてよりよく理解出來るとも言ひ得る面があるのである。

二

朱子の論語解釋の態度・方法・經緯に就いて考察し、前節の意を具體的にし徹底させたいと思ふ。論語集註序說に次の程子の語を引いてゐるのは朱子自身の體驗でもあらう。

> 頤十七八より論語を讀む。當時已に文義を曉るも、之を讀むこと愈々久しくして但だ意味深長なるを覺ゆ。

朱子自身も、

> 某艸角より論孟を讀む。自後一本の文字論孟より高きものを欲するも竟にこれ無し（語類一〇四）。

と言つてゐる。以下に述べる朱子の論語解釋の經緯もこの様に一貫して無限に深化する受用の中での事であつて、例へば始は論語を學び、中頃これを離れ疑ひ、彷徨を經、後終に論語に歸つたといふ如きものではない。

朱子は言ふ、

> 某少き時學を爲す、十六歲にして便ち理學を好み、十七歲にして便ち今の學者の見識あり。後謝顯道の論語（注解）を得て甚だ喜び乃ち熟讀す。先づ朱筆をもつて語意の好き處を抹出す。又熟讀して趣を得、朱抹の處太だ煩はしきを覺えて再び墨筆を用ひて抹出す。又熟讀して趣を得、別に青筆を用ひて抹出す。又熟讀して其の要領を得、乃ち黃筆を用ひて抹出す。此に至りて自ら得る處甚だ約にして只是れ一兩句の上なるを見る。却つて日夜此の一兩句の上に就いて意を用ひて玩味するに胸中自ら是れ洒落なり（語類一一五。又一〇四・一二〇にも同樣のことを言ふ）。

聰明顯悟の朱子が若くして北宋先儒の高遠精微な哲學的理論に心を牽かれ、その概念的理解に長じた事は想像に難くない。而してその理論的構造の背後の精神體認といふことを謝上蔡によつて知らされ、以後內面へのひたすらなる沈潛を重ねた事は最も注意すべき事と思ふ。その得たる「一兩句」の何であつたかは知り得ぬが、この約なる所を得たことは卽ち孔子の人格・精神に觸れ得たこ

とを物語るものであり、この點の長養によつて論語の各章が活き活きと一個の精神の露現として捉へられ、日常生活に於ては胸中洒落となるのである。朱子は當時孟子が人を激發するところあるを好み、禪學が靈性に富むを愛してゐたが（語類一〇四）、謝上蔡もこの靈活な體認を豊かに持つてゐた人であり、朱子は論語の理解に於ては謝上蔡に負ふ所大であつたのである。朱子は又言ふ、

上蔡の論語の如きは義理未だ盡さずと雖も、然れども人多く看るを喜ぶ。正に其の說過ぐる處あり、人を啓發し得て看る者をして入り易からしむるを以てなり（語類一一七）。

この言葉は後年程子の說を深く繼承するに至つて發せられたものであるが、而も上蔡の說の長所は朱子自身の體驗に由つて十分に認められてゐるのである。

次に、朱子は二十四才にて同安縣の主簿の任に赴く前から、論語の子夏之門人小子の章（子張篇）の解釋に苦しんでゐたが、同安縣に在つても夜を徹して考へ、又山中や路上にても思索を重ねた結果、忽ち透るところあつた。實に「限りなき思を費しても理解し得ず、」徹夜、曉に及んで杜鵑の啼き叫ぶを聞きし當時の苦心は、後年杜鵑を聞いても想起される程であつた（語類四十九及び一〇四）。朱子が此の章の解釋に苦心した事は集註にも窺ひ得るのであるが、その疑問といふのは、伊川や上蔡等が形而上的な觀點を强調して、洒掃應對の卑近事を精義入神と直ちに一理であり、理には元來大小なしと解したのに對し、それでは論語の本文の意に合はず、遂には日常の卑近事を輕視し、儒を去つて佛老に入る惧れがあるではないかとの疑問であつた。これは當時謝上蔡の說を喜び深く影響された朱子としては注意さるべきことで、格物致知を重視して日常の着實な工夫を說いた後年の朱子の考がよく看取されるのである。苦心思索の結果朱子は次の如き解決に達した、卽ち洒掃應接は小事・末事であるが初學の者の通過すべきもの、序に循つて漸進すべきもの、精義入神の如き大事にはその後に進んでゆくべきものといふのである。究極的には洒掃應對と精義入神とは相表裏するものであるが直ちに一であるといふのではなく、末なる洒掃應對を學ぶ中に精神入義への途が開けてゐるといふのである。ここに朱子の著實な考へ方の一面を知る事が出來る。かくて朱子は論語の各章の背後に孔子の人格・精神を端的に捉へる工夫と、かかる人格・精神も現實的には最も卑近な日常の實踐に於て如實に捉ふべきことと、この兩者を併せ兼ね得たのである。而してこれは三十歲以後、李延平の未發の中の氣象や、張南軒の察識を主とする說に深く影響されつつも、「本末精

粗大小詳略、偏廢あるなし」、「聖人の言は大中至正の極にして千世の標準なり」（文集七十六論語訓蒙口義序）といふ偏倚なき全的な見解を持ち得た所以である。その頃の朱子は程子の說に深く啓發されるところがあつた。卽ち朱子は三十四歲の時に論語要義を、次いで論語訓蒙口義を、四十三歲の時に論孟集義を作つたが、此等の註解は程子の說を中心としてその門人朋友の說を主に集めたものであつた。朱子は、程子の說はその門人上蔡の說の如く人を驚かせ喜ばすところがないが、その勝れてゐるところは「義理に深い者でなくては看易くない」と言つてゐる（語類一一七）。而してこれは又朱子の論語理解の深化なのであり、程子と孟子と論語とを貫く精神に觸れることであつた。卽ち四十三歲に成つた論語集義の序（文集七十五）に、

論語の言は包まざる所なし、而して其の人に示す所以の者は操存涵養の要にあらざるなし。七篇（孟子）の指は究めざる所なし、而して其の人に示す所以の者は類ね體驗擴充の端多し。夫の聖賢の分其の同じからざること固に此の如し。然り而して體用は一源なり、顯微は間なし。是れ則ち夫の（程）先生の學の至にあらざれば其れ孰か能く之を知らん。嗚呼これ其の百世絶學の後、奮ひて獨り千載不傳の傳を得る所以なり。

と言つてゐる。これ朱子が孔子の人格・精神に觸れ得た所以であり、その內容は操存涵養と體驗擴充との體用一源・顯微無間といふことに外ならず、その一源・無間なる大中至正の極は天理とも言はれる。集註に天理の語の出て來る箇處は朱子が孔子の人格・精神を深く感得した箇處といふことが出來ようが、この點は後節に詳しく考察する筈である。

右の如き朱子の自覺は又「聖傳の統を明かにし、衆說の長を成し、俗流の謬を拆く」との自負となり、四十八歲にて集註の一應の成立を見るに到つたのである。論語の註解は旣に三十歲の時に始められ（語類一一六）、その樣子は次の朱子の言葉によつて窺ひ得る。曰く、

某舊と文字を看るに甚だ力を費せり。論孟諸家の解の如きは一箱あり。一段を看る每に必ず檢すること許多、各々諸說の上に就いて意脈を推尋し、各々見得て落着して然る後に其の是非を斷ず。是なるは都べて抄出し、一兩句の好きも亦抄出す。未だ今の集註の簡にして盡くすに如かずと雖も、然れども大綱は已に定まれり。今の集註は只是れ那の上に就きて刪り來るなり（語類一二〇）。

かくて要義・訓蒙口義・集義等の論語の註解は極めて愼重に行はれたことを知る。而してこれは前述の如き程子・

孟子・孔子を貫く道統を捉へたことによつて可能であつた。そしてこの道統の自覺の深化が集註の成立となつたのである。されば集註に就いて、

集註は乃ち集義の精髓なり（語類十九）。

某の語孟の集註、一字を添へ得ず、一字を減じ得ず（同上）。

論語を看るは只集註を看て涵泳せば自ら味あらん（文集五十五答潘謙之）。

と自負し得たのである。これにて朱子三十歳以來の論語註解の業は一應成つた。集註は程子の說を中心としてその門人及び諸家數十人の說を集めたものでたもので、諸家の說は一句の好きをも棄てなかつた。而も注の文が本文と別行とない樣に注意を拂つてゐる（この點朱子は古註の好さを認め、張南軒の論語說を批判する（文集三十一答張敬夫））。而して四十八歳以後にも集註の改訂は續けられて行つた。曰く、

論孟集註、後來改定する處多し（文集六十二答張元德）。

近日章句集註の四書却つて看得て一過す。其の間是正する所多し。深く懼る、向來日用の疎略なりしを（續集卷二答蔡季通）。

ただ、朱子は四十八歳以後は寧ろ大學や中庸の註解に多くの力を注いだようで、右の言葉にも拘らず、集註は四十八歳の頃にて殆ど完成されてゐたと看るべきかと思ふ。

以上、朱子の論語注解に就いて考察したが、論語の朱子學的理解には先づ集註を第一の根據としなくてはならぬことも自ら明かであらう。そして語類の論語の部を看るに、朱子とその門人との問答は集註の說の理解に關するものが極めて多い。これは朱子やその門人達が集註を重んじてゐたことを物語るものであり、我々の理解・研究も集註を主としつつ、語類の中にひらめいてゐる朱子の鋭い見解を正當に敏捷に捉へてゆく事が大切かと思ふのである。

三

孔子は言つた、

二三子、我を以て隱すと爲すか。吾爾に隱すなし。吾行ふとして二三子に與（あづ）さざるものなし。是れ丘なり（述而篇）。

その集註に言ふ、

諸弟子、夫子の道高深にして幾及すべからざるを以て、故に其の隱すあらんを疑ひ、而して聖人の作止語默敎にあらざるなきを知らざるなり。

呂氏曰く、聖人道を體して隱すなく、天象の昭然たる

と與に至教にあらざるなし。常に以て人に示すも人自ら察せず。

孔子の一言一行にも孔子の全人格・全精神は活き活きと露現してゐるといふべく、眞に孔子を知るとはその一言一行のままに如實にその人格・精神をとらへることでなければならぬ。この點を理解し得なければ孔子を以て隱せりとするに至るのであらう。孔子の言行のすべてが教であり、その道に入るべき門戸であるが、それは一面では門戸として入るべき門戸なしといふ事になり、孔子を十全に理解することは困難なわけである。これ第一節に引いた顏淵の歎ある所以である。ここに朱子が謝上蔡・程子・孟子によつて孔子の眞精神に達し得たことを考へ、更には朱子がこの體驗を基として先人の哲學的省察の說を集大成した集註によつて論語理解の途を辿ることの極めて有益なるを知る。更には集註に「天理」の說ある箇處を最も注意すべき事も前節に指摘した。この樣に考へて論語を看れば、一貫章（里仁篇）・吾與點也の章（先進篇）・顏淵問仁章（顏淵篇）及び子在川上の章（子罕篇）等の各章に朱子の最も重要なる見解が述べられてゐるのを知るのである。而も此等の章の重要性は論語中の子貢と孔子との問答の考察によつても知り得るのである。子貢は孔子の言葉・心事をよく理解した人であるが、以下に述べる如く結局は孔子の眞精神の把握に欠くる憾みがあつた。而して此の憾みなき弟子が曾子・顏子なのであつたことを知るのである。

以上の樣な觀點から、本節では子貢と孔子との問答を主として考へ、論語を眞に理解する所以を更に考察してみたい。

子貢は能く問ひ得て孔子の意を盡さしめ、又孔子の心事をよく理解した弟子であつた。孔子の死後、他の弟子は三年の喪に服したが、獨り子貢のみは六年その墓の側を去らなかつた。子貢と孔子との問答をみるに、子貢問曰何如斯可謂之士矣の章（子路篇）にては、孔子の答に對して、「敢へて其の次を問ふ。」と二回問を發し、更には「今の政に從ふ者は何如。」と重ねて問ひ、孔子をして「噫、斗筲の人何ぞ算ふるに足らん。」と嘆ぜしめてゐる。かかる徹底した問ひ方は他の弟子には見られない、子貢獨特のものであつた。又「賜や、始めて與に詩を言ふべきのみ。」と孔子を感心せしめてもゐる（學而篇）。この他子貢曰君子亦有惡乎（陽貨篇）・子貢問政（顏淵篇）・再有曰夫子爲衞君乎（述而篇）等々、子貢が能く問ひ得た章が論語の中に相當多い。子貢は又孔子の人柄なり德行なりをよく形容した。卽ち子禽の問に答へた中に、「夫子は溫良恭謙讓。」といひ（學而篇）、子張篇にも孔子をよ

く説明してゐるのである。子貢は生れつき聰明な人であつて、その若き頃は「人を方ぶ」のを孔子に貶せられたり(憲問篇)、「賜や命を受けずして貨殖す。億すれば則ち屢々中る。」と批判されたりしてゐるが(先進篇)、「性と天道とを聞いて後はこの様なこともなかつた」(先進篇集註引程子の說)のであらう。自ら顏回に及ばざるを知り(公冶長篇)、終身之を行ふべき要を孔子に問ふ(衞靈公篇)の明を具へるに至つたのである。以上によつて子貢と孔子との問答が論語の中でも注意すべきものであることも略々察し得るであらう。而も次の三章は右に擧げた子貢と孔子との問答よりも遙かに重要な意味を持つものである。

(1) 子曰く、我を知るなきかな。子貢曰く、何んすれぞ其れ子を知るなからんや。子曰く、天を怨みず、人を尤めず、下學して上達す。我を知る者は其れ天か(憲問篇)。

(2) 子曰く、予言ふことなからんと欲す。子貢曰く、子もし言はずんば則ち小子何をか述べん。子曰く、天何をか言はんや、四時行はれ、百物生ず。天何をか言はんや(陽貨篇)。

(3) 子曰く、賜や、女予を以て多く學んで之を識る者となすか。對へて曰く、然り、非らざるか。曰く、非らざるなり。予一以て之を貫く(衞靈公篇)。

(1)(2)をみるに、孔子の詠嘆的な言葉を直ちに受けて一句を言ひ得るものは子貢の外になかつたのであらう。而して子貢の言葉を明確には否定も肯定もせず、孔子は直ちに自己の深い心を詠嘆的に述べてゐる。詠嘆に於て心事は全的に露現する。かかる孔子の言葉に對しては子貢も默する外はなかつたのである。朱子は、「孔子の門人では顏子・曾子以外では子貢が孔子の意を曉り得た。そこで孔子も子貢に對してはこの様な話し方をしてゐる。然し孔子の言葉に更に一句を言ひ得ず、孔子が言ひ放した形になつてゐるのをみると、やはり子貢も十分曉つてゐたとは言へぬ。」と述べてゐる(1)に就いて語類四十四)。集註にも、

蓋し孔門に在りては惟子貢の智のみ幾ど以て此に及ぶに足る。故に特に語りて以て之を發す。惜しいかな、其の猶ほ未だ達せざる所あり(憲問篇)。

と言つてゐる。これに就いて、朱子の門人が、子貢がもし能く達してをれば孔子と子貢との問答はどうなつてゐたらうかと問うたのに對して、朱子は、「きつと何か言つてゐる筈だ。孔子が折角この様に說いてゐるのに默つてゐたのは惜しいことだ。」と言つてゐる(語類四十四)。又(2)に就いても集註では次の如き程子の說を擧げてゐる。

「孔子の道は日星の如く明かであるのに、門人が十分にこの事を曉らぬので孔子は『予言ふことなからんと欲す。』と言つたのである。そこで顏子ならばすぐ默識するのだが、その他の門人は疑を免れない。子貢が『小子何をか述べん。』など言つたのも默識するところがないからだ」（取意）。更には(1)(2)にて子貢が再び問ひ得なかつた事に就いて朱子は次の如く言ふ、

是れ聖人の語意を曉らざるにあらず。只是れ默して契合する處なく、曾つて默地に省悟して他の那の意思を觸動する處あらず。若し默契する所あらば須らく發露し出し來つて但には已まざるべきなり（語類四十四）。

この言葉は極めて重要である。上述の「更に一句を言ふ」とはこの默契あつてはじめて可能なのである。達・默識心通といふもこの事であり、第一節以來論じ來たところの人格・精神に觸れることもこれに外ならぬ。默契は深く內面的である。右の「意思を觸動す」とは感發・感激のことである。

次に、(3)に就いて看れば、これに關連して直ちに想起するのは論語（里仁篇）の有名な一貫章、卽ち、

子曰く、參や、吾が道、一以て之を貫く。曾子曰く、唯、子出づ。門人問ひて曰く、何の謂ぞや。曾子曰く、夫子の道は忠恕のみ。

であつて、而してこの兩者を對比して集註（衞靈公篇）に言ふ、

尹氏曰く、孔子の曾子に於ける、其の問を待たずして直ちに告ぐるに此（一以て之を貫く）を以てし、曾子も復た深く之を喩りて唯と言ふ。子貢の若きは則ち先づ其の疑を發せしめて而る後之に告ぐ。而して子貢終に亦曾子の唯の如くなる能はず。二子學ぶ所の淺深此に於て見るべし。

曾子の唯は右の「默契」であることは看易いことである（一貫章の集註にも默契をいふ）。かくて「默契」の一語は論語を讀む祕奧の要語とも言ふべく、曾子・顏子と孔子との問答が論語の中でも最も重要なのもこの故と言ひ得るのである。

然るに、論語には孔子一人の言葉を記した章も多いが、それ等も孔子が弟子の誰かの爲に言つたものも多いであらうから、必ずしも孔子の精神が直き直きに露現してゐるとは言へぬ點もあらう。却つて子貢や曾子・顏子に語つた章の方が孔子の意をよく表はしてゐるとも言へるであらう。ただ孔子の詠嘆の籠つてゐる言葉に注意すべく、就中、子在川上章の如きは集註にも道體を言つたものと解し、深い哲學的思索の文を載せてゐる。前述の如く、詠嘆にはその人の深い心が活き活きと露現する。それは

思惟を經たものではないが、その深い響は人の心を打ち、哲學・藝術の母胎ともなるのである。川上章の集註には「聖人の心の純として已まざるを見る」との程子の言葉を擧げてゐる。かくて川上章は孔子の精神を直き直きに把握するに最も大切な章と言ふ事が出來よう。而して吾與點也の章も孔子が喟然として歎じたところで、やはり注意すべき章である。ただ川上の章に比べると、曾點の言葉に寄せて發せられたもの、その故に後述の如く種々の議論が起るのである。

看來つて論語の中には孔子の精神が直顯してゐる章、弟子の言葉や行に寄顯してゐる章があり、その寄顯の章にも種々の程度があることを考へさせられるのである。卽ち川上章は直顯の章、一貫章・顏淵問仁章・吾與點也章の如きは寄顯の章ではあり乍ら、孔子の眞意が殆ど直顯してゐて、寧ろ孔子の眞精神に觸れるには此等の章に就いて精察することが大切かと思はれる。そして若し一旦默契するところあらば、論語の各章何れか孔子の人格・精神を顯はにせざる章ありやといふ事にならう。元來孔子は何等隱すところがなかつたのである。朱子も

聖賢の千言萬語、只是れ人をして天理を明かにして人欲を滅せしむ（語類十二）。

と言つてゐる。これ論語を統一的にみること卽ち孔子の人格・精神に觸れることによつて、孔子の一言一行にその全人格・全精神を捉へることを言ふのである。而もそれは著實な工夫を忘れることではない。弟子が「天下事々物々、是れ天理流行にあらざるなし」と言つたのに對して、

公の說く所の如きは只是れ箇の天理流行を想像するのみ、却つて下面許多の工夫なし（語類一一七）。

と批評してゐる。「下面許多の工夫」とは論語の一章一章を著實に學び修めてゆく如きことであつて、これは修養には長き日月を要するといふことでもある。而して著實な工夫を强調するか、或は靈活な究極的な體認を主として說くかに學風の相違が生ずるのであるが、然るに右の天理・人欲の論の如きは論語を最も根本的に且つ普遍妥當的にみるものと言ふべく、朱子學・陽明學もこの點では全く一致するのである。又「樊遲從舞雩之下」章（顏淵篇）の「事を先にし得る後にす、德を崇ぶにあらずや。」に就いて朱子が

凡そ人若し能く當に爲すべき所を知りて利を爲すの心なくば、這の意思自ら高遠なり（卽ちこれ天理）。才かに些の小利害を爲し些の小便宜を討ぬれば、這の意思便ち卑下なり了る（卽ちこれ人欲）（語類四十二）。

と言ふが如きも陽明學にも通ずるのである。かくて論語

に說くところの仁を行ふの方（用・實行）の積累によつて仁（體・眞精神）を捉へ、一面、體・眞精神から用・實行が流出するといふ如き見解を持つのが大切であり、十全であると思はれる。これは極めて難しいことと言はねばならぬが、ただ前述の如き孔子の精神がよく現はれてゐる章に就いて、朱子の深き感得に由りつつ理解を進めてゆくことが先づ第一に大切なことであらう。

四

一貫章に就いて朱子は、「此は是れ論語中第一の章なり。」（語類二十七）と言ふ。それは孔子自身が自己の道を端的に述べ、曾子が深く開悟したといふ人格的な觸れ合ひがあつた故である。而して朱子はこれに哲學的解釋を與へて言ふ、

聖人の心は渾然たる一理にして、泛く應じ曲さに當り用各々同じからず。曾子其の用處に於ては蓋し已に事に隨つて精察して力めて之を行ふ。但未だ其の體の一を知らざるのみ。夫子其の眞積り力むること久しくして將に得る所あらんとするを知る。是を以て呼んで之に告ぐ。曾子果して能く其の指に默契す、卽ち應ずることの速かにして疑なきなり（集註）。

「體の一を知る」は默契による。それは心が根源的に深まることである。一事一事の實行（用）に當つてはたらいてゐた心が深まつて、一事一事に連貫・統一を得、新たな意義を得來るのである。かくて默契は飛躍であり心の靈活である。ここに確たる人格・精神が顯現するのである。朱子は言ふ、

（曾子）初は一事は只是れ一事、百件の事は是れ百件の事なるを見る。夫子の一點醒を得ては、百件の事は只是れ一件の事、許多般樣は只一心より流出す。曾子此に到りて方に這の一箇の道理を信じ得たり（語類二十三）。

默契は自覺のことであり、それは自由を得る所以でもある。前揭の子貢に對して孔子が一貫を言つた章の集註に謝上蔡の說として、「上天の載は聲もなく臭もなし。」を引いてあるのもこの默契の意に外ならず、宋學に於ける默契・默識心通・無極・一貫・一理・天理等の語は人格・精神の根源に觸れた語と知るのである。孔子が曾子に向つて、「吾が道一以て之を貫く。」と言つたのは曾子の默契を期しての事であつた。これを曾子より言へば、「下學して上達する」の下學が十分であつた、一以て貫かるべき百事の修業が濟んでゐたのであつた。それは曾子が日に三省した（學而篇）といふ如き內面的のもので、「多く學んで識る」事ではなかつた。曾子の答へた一語「唯」

はその默契を端的に示すものであるが、更に曾子が「夫子の道は忠恕のみ。」と言つたことは曾子の省察を要約して示すもの、曾子が孔子に學びしところの眼目を物語るものとなるのである。さればこの時の「忠恕」は言はば「位の高い」忠恕、一貫の精微に徹した境地に裏附けられた忠恕であると言ひ得よう。朱子は言ふ、

孔子の曾子に告ぐる一貫の語の如きは、他人之を聞けば只是れ一貫、曾子之を聞けば便ち能く融化す。故に「忠恕のみ」を發し出し來る（語類二十四）。

右の「融化」は默契のこと、「忠恕のみ」とは曾子平素修養の得力を以て一貫の祕を發したものとなる。ここに到つて孔門の七十子も如聾如啞であつたといふも可であらう。

この章に於ける忠恕に就いては、語類（二十七）に天地無心の忠恕・聖人無爲の忠恕・學者着力の忠恕に分ち、これを又維天之命於穆不已・一貫・盡己推己とに當ててゐる。この解釋は程子に多く負ふものであるが、この三者は三にして一、一にして三、體よりして言へば一、用よりして言へば三である。されば三者に通じて用ひられてゐる忠恕は天地・聖人の本質即ち無心・無爲に對當し得るものと言ふべく、曾子が天地・聖人の祕奥に參じ得た要訣とも言ひ得る。集註には「一貫」に就いて體と用、一理渾然と泛應曲當、天道と人道、一本と萬殊、至誠無息と萬物各得其所、維天之命於穆不已と乾道變化各正性命といふ如き形而上的な解釋を下し、更に「萬殊の一本なる所以、一本の萬殊なる所以」といふが、これは夫の默契心融に外ならない。

更には「忠は無妄なり、恕は忠を行ふ所以なり。」「動くに天を以てするのみ。」と言ふ、忠は人にして天に迫る所以、學者にして聖人の心を得る所以であるを知る。「動くに天を以てす」とはこの章の忠恕が孔子の一貫に點醒せられ、一貫に裏づけられた境地に外ならない。

孔子が子貢に對して一貫を言つた章の集註に謝上蔡の次の如き說を引いてゐる。

聖人豈に博きを務むる者ならんや。天の衆形に於けるが如く、物々にして刻みて雕るにあらざるなり。故に曰く、予一以て之を貫く。德の輝きこと毛の如し、毛は猶ほ倫あり。上天の載は聲もなく臭もなし。至れり。

これに就き朱子は語類（四十五）に言ふ、

天は只是れ一氣流行して萬物自ら生じ自ら長じ自ら形あり自ら色あり。豈に是れ逐一粧點して此の如くなるを得んや。聖人は只是れ一箇の大本大原の裏より發し出して、視は自然に明、聽は自然に聰、色は自然に溫、

貌は自然に恭なり。父子に在りては則ち仁となり、君臣に在りては則ち義となる。大本の中より流出して便ち許多の道理を成す、只是れ這箇の一便ち貫き將ち去る。主とする所は是れ忠、發し出し去るは是れ恕にあらざるなし。

この朱子の言葉は右の上蔡の高明の論に影響されてか靈活にして動的であり、天地の無心・聖人の無爲の意を說いてゐる。一氣流行・大本大原の裏よりの發出とは恕の意でもあるが、ここでは忠を主とするが故に流行・發出ありといふのが眼目となる。已に上蔡が一貫を說くに詩を以てし、「得て說くべきなき」（語類四十五）密意を贊してゐる。詠嘆は前述の人にして天位に在ることである。而してかかる境地を端的に表明したのが曾點である。

五

曾點が春行舞雩詠歸の志・願を述べたのに對し、孔子は喟然として歎じて「吾は點に與みせん。」と言つた。ここに孔子の深いこころが看取される筈であるが、ただこれだけの簡單な言葉である。そこに含まれてゐる詠嘆の響を感得し、曾點の境地を解明してゆくには、集註・語類の說に由るのが極めて有益である。朱子は言ふ、

曾點の學、蓋し以て夫の人欲盡くる處天理流行し、隨處に充滿して少しも欠闕するなきを見るあり、故に其の動靜の際從容として此の如し。而して其の志を言へば則ち又其の居る所の位に卽きて其の日用の常を樂しむに過ぎず。初より已を舍て人の爲にする意なく、其の胸次悠然たり。直ちに天地萬物と上下流を同じうし、各々其の所の妙を得ること隱然として自ら言外に見はる。三子の事爲の末に規々たるに視ぶれば、其の氣象侔しからず。故に夫子歎息して深く之を許せり（集註）。

右の文中、「人欲盡きて天理流行す」、「動靜の際從容」、「胸次悠然」等の語によつて、曾點の境地を窺ふことが出來る。曾點の「氣象」は子路・冉有・公西華よりも高かた。更に朱子は曾點・曾子父子を對比して次の如く言つてゐる。

曾子は未だ曾つて箇の大統體（卽ち一貫）を見得ず、只是れ事上より積累して做し將ち去り、後來方に透徹す。曾點は都べて未だ曾つて做し去らず、却つて先づ曉り得たり。更に他をして曾子の如く恁地に細密に做し將ち去らしめば何ぞ比すべけんや。只他（曾點）見得て快き後、事に當らず、所以に見得了りて便ち休す。故に他志を言ふ、亦是れ事を做し去らんと要する底ならず、只是れ心裡恁地に快活にして日を過さんと要す

るのみ（語類四十）。

右の言葉の中、「事を做す」とは集註に言ふ「己を舍て人の爲にする」忠恕の如きであり、忠恕は曾子一生の學問得力のところであるが、曾點は一貫の意を見て忠恕には及ばず、ここに高明快活なる境地を開いたと言へよう。「己を舍て人の爲にする」忠恕のこころなきは決して上乘の事ではない。然し區々たる忠恕の行爲のみにて一貫の境に達しなければその忠恕も決して上乘のものではない。寧ろ「胸次悠然、直ちに天地萬物と上下流を同じうし、各々其の所を得るの妙」を觀ずる方が高い境地とも言へよう。孔子が喟然として歎じたからには、必ずや道を修むるに資し得る點も大であらう。以下更に曾點の境地に就いて考察しよう。朱子も「此と一貫との兩處是れ大節目なり。當に時々心に經て始めて得べし。」（語類四十）と言つてゐる。

曾點の見解・境地は透徹・高明・快活であつた。語類には曾點の氣象に關して、從容優裕・悠然自得・從容洒落・脫洒・天資高明・資質明敏・志如鳳凰翔於千仞等々の評語が見える。この高明なる氣象がその見地をして大本・大原・一貫・道體に洞然たらしめるのである。事々物々上皆これ天理流行なりと徹見する。「眼前觸るる處皆是」・「這の道理本來到る處都べて是」（同上）と觀ずるのである。ただそれは本來の理を觀ずるのであつて實踐の地に處るのではない。かくて曾子の見處・體認は所謂「證悟」といふべく、その證の內容は平素の愼密なる工夫の一々である。曾點のそれは「解悟」であつて、動的な直覺が活き活きとはたらいてゆく。本來的なものの上に立つの氣象がある。（これ卽ち前節の終に引いた謝上蔡の說及びそれに就いての朱子の說の境地でもある。）故に天理流行と言つても曾子と曾點の場合には相違あることを知らねばならない。而して本原よりの流動を觀、心裡の快活を覺えるところは「樂」の境地である。前揭集註の天理流行・隨處充滿・從容を見て悠然たるは卽ち樂の境地である。曾點にとつては「世間細少の功業は皆以て其の心に入るに足らず。」であり、その氣象は「人をして無限の利祿鄙吝の心を消さしめる」に足るであらう。朱子は又言ふ、

明道云ふ、萬物各々其の性を遂ぐと。此の一句正に好し、堯舜の氣象を看、且つ暮春の時物態の舒暢すること此の如きを看るに。曾點の情思又此の如し、便ち是れ各々其の性を遂ぐるなり（語類四十）。

曾點の境は萬物をして其の性を遂げしめんとするのではなく、萬物と與に自らの性を遂げつつ、それを觀じて樂しむのである。而してその見處の高明、感得の純なるが

故に、自己を超えて萬物と異なる妙境に入り、天理の境に遊ぶのである。（それが更に一轉すれば天地の慈意に接し得る境地も開けて來る。）集註に言ふ、

孔子の志は老者は之を安んじ、朋友は之を信じ、少者は之を懷け（公冶長篇）、萬物をして其の性を遂げざるなからしむ。曾點之を知る。故に夫子喟然として歎じて、吾は點に與せんと曰ふ（程子の語）。

曾點は必ずしも子路・冉有・公西華の事を爲し得なかつたであらう、而も孔子の仁の意を根本的に解し悟つたのである。（子貢の知よりもより根本的な解悟であつた。）

然るに朱子は一面では曾點を「工夫疎略」と評し、「今、人若し他を學ばんと要せば便ち狂妄なり得了らん。」と言ふ。更には曾點の體認は莊子に似てをり、近くは邵康節に似るとも言ふ。これ日常の實踐を重んずる德行の立場からの事でもあつて、前揭の曾子と曾點とを比較した朱子の言葉の中に、もし曾點が更に曾子の如き細密の工夫を行つたならば曾子など比較にならぬ位の優れた地位に到り得ようと言つてゐる。ただ曾點の境地からは細密の工夫に向ふは難しく、疎略、狂妄となり易いと朱子は看たのである。されば又別のところで、

（曾子は）一唯の後、本末兼該、體用全備す。故に其の道を傳ふるの任父に在らずして其の子に在り、則ち其の虛實の分學者其れ必ず以て之を察することあるべし（語類四十）。

とも言つてゐる。曾點の見處は高明・快活であるが虛である。本原・本體を觀てはゐるが、それが更に日常の行事（實）を貫き融會するのでなければならぬ。曾子は日常の行事に精密であつたが見處の高明に欠くる點があつた。而して曾點・曾子を兼ねたのが顏淵であると朱子は見るのである。曰く、

曾點は見得了りて肯へて行かず。曾子は未だ見得ずして力を强めて以て進む。顏子は見と行と皆到る（同上）。

曾點は狂簡の風あり、曾子は魯鈍、顏淵は賢者であつた。

六

顏子の好學は孔子の深く稱讚するところであり（雍也篇）、顏子は孔子の言を聞いて說ばざるところなく（先進篇）、違はず（爲政篇）、惰らず（子罕篇）、ひたすら進んで止らず（同上）、既にその才を竭し（同上）、遂に三月仁に違はざるの境に達した（雍也篇）。而してその樂しむところは夫の曾點の狂にあらず、孔子をして「賢なるかな回や」と感歎せしめてゐる（雍也篇）。そして生前孔子をみること父の如くであり（先進篇）、死しては孔子をし

て「天予を喪せり。」と歎かしめ、慟せしめてゐる（同上）。かかる顏淵が孔子によつて學び得たものは何であらうか。この點の考察は孔子の人格・精神に觸れるに有力な途である。ここに先づ顏淵が孔子の偉大さに喟然として歎じた章（子罕篇）が考へられる。歎息・詠嘆に於て兩者の感應道交が活き活きと行はれてゐる。集註に言ふ、仰げば彌々高くして及ぶべからず、鑽れば彌々堅くして入るべからず、前に在りとせば後に在りて恍然象を爲すべからず。此は顏淵深く夫子の道の窮盡なく方體なきを知りて之を歎ずるなり。

顏子の歎息は顏子の未熟を物語るのではない。上に歎ずべき事なくして歎じ、後に孔子の敎へしところを述べてゐるのは卽ち顏子の學が熟し得るところがあつた故と考へられる。かくて孔子の敎導顏子の受用は博文約禮の二事にて要約し得る。この場合の博文約禮も曾子の忠恕と同じく極めて「位の高い」ものと言ふべきである。さればこの博文約禮よりして論語を統一的にみることも十分可能なのであるが、相反する方向の博文と約禮とを統一する全的な體認は「中庸」に至つて最も深刻となるのである。次に、この顏淵の歎の終は「立つ所ありて卓爾たるが如く、之に從はんと欲すと雖も由なきのみ」といふ、これを朱子は「顏子自ら其の學の至る所を言ふなり。」（集註）と解した。この章全體あくまで歎息に終始してゐる中に、孔子の敎導・顏子の受用の全體が窺はれるのである。而して此の章が問答の形をとつたのが顏淵問仁の章であつて、そこには孔子の循循然として善く顏子を誘ひ、顏子のその才を竭す有樣がよく窺はれる。歎息の響去つてそこに籠つてゐた全的な直觀が問答の形によつてその內容を露現したとも言ひ得よう。

顏淵問仁の章に就いて集註に言ふ、

此の章の問答は乃ち傳授の心法、切要の言にして、至明にあらざれば其の幾を察する能はず、至健にあらざれば其の決を致す能はず。故に惟だ顏子のみ之を聞くを得たり。而して凡そ學ぶ者も亦以て勉めざるべからざるなり。

かかる重要な意味を持つこの問答を先づ問答の行はれ方の點から考察してみよう。論語は孔子とその弟子との問答の語が主となつてゐる點からも、問答に就いては十分注意しなければならず、第三節にては子貢と孔子との問答をやや詳しく考へてみたのであるが、この顏淵問仁の章は、顏淵が仁を問うたのに對して孔子が克己復禮を以て答へた。克己復禮に就いては後に考察することとして、この孔子の答を聞いて他の弟子ならば或は克己とは何か、復禮とは何かと問ひ返へすであらうが、顏子はただ「請

ふ其の目を問はん」と言つた。これは顔子が默契心融するところがあつたことを示すものである。次いで、孔子が「非禮視る勿れ。云々」と答へたのに對して顔子は、「回不敏なりと雖も、請ふ斯の語を事とせん。」と言ふのみである。正しく孔子の說を聞いて說ばざるなき有樣であつた。司馬牛も同じく仁を問うたが、孔子の答に對して、「其の言や訒ふ、斯れ之を仁と謂ふか。」と問ひ返してゐる。これは司馬牛の心が默契を得てゐない證據と言ふべく、看來つて前述の子貢の問の如きも司馬牛に類するのであつて、そこには默契・心融がないと言はねばならない（以上語類四十一の說を多く取用した）。孔子は顔淵を評して、「吾回と言ふこと終日、違はざること愚の如し。退いて其の私を省みるに亦以て發するに足る。回や愚ならず。」（爲政篇）と言つたが、司馬牛や子貢の問は孔子の答に違ひ、發越して賢なるが如くであるが、默契なき故に孔子の意を發するに足らなかつたのである。右の「吾回と言ふ」の章の集註には李延平の語を引いてゐる。曰く、

顔子は深潛純粹、其の聖人に於ける、體段已に具り、其の夫子の言を聞きては默識心融し、觸處洞然として自ら條理あり。

顔子は精粗本末、下學上達の全體を一時に見得て透徹してゐて、曾子が孔子の一點醒を得てはじめて透徹し、曾點が下學の工夫（己を舍て人の爲にする等の）に心を用ひなかつたのに比して遙かに優れてゐると言ひ得よう。朱子は又言ふ、

孔子は惟々顔子と仲弓にのみ實に之に告ぐるに仁を爲すの事を以てす。餘は皆其の人に因りて之を進む（語類四十二）。

これは仲弓問仁の章にも默契を示すところの「請ふ斯の語を事とせん。」といふ言葉があり、且つ孔子の答へた內容が深い意味を持つが故に朱子がこの樣に言つたのであらう。亦以て論語を讀むに有益な言葉と言ふべきである。而して仲弓問仁の章の集註に、

愚按ずるに、己に克つて禮に復るは乾道なり。敬を主として恕を行ふは坤道なり。顔冉の學其の高下淺深此に於て見るべし。然れども學者誠に能く敬恕の間に從事して得るあらば、亦將に己の克つべきなからんとす。

と言ふ。又語類（四十二）に、

夫子の顔淵に告ぐるの言は、大段剛明なる者にあらざれば以て之に當るに足らず。苟も然らずとせば（剛明でなければ）、只且く仲弓に告ぐる處に就きて力を着けよ。仲弓に告ぐるの言は、只是れ淳和の人皆這の兩節

（敬と恕を說く）を守るべし。

ともいふ。かくて孔子が顏淵に敎へた克己復禮は極めて重要な語であるを知る。而して前述の曾子の忠恕は仲弓問仁の章の敬恕に相應するものと言ふべく、この點を明かにしてをくことが顏淵問仁の章の集註の深い說を理解する上に大切である。又仁の解釋として朱子は、「愛の理、心の德」（學而篇集註）と言ふ、これは論語更には孟子の全般に通じ、重要な言葉であるが、然るにこの章では「本心の德」と解してゐる。これは朱子が右に述べた如きこの章の獨自の重さによることを知らねばならない。顏淵にとつては「愛の理、心の德」の工夫は濟んでゐたといふも可である。然らば顏淵に問題となつたことは何か。それは集註の

蓋し心の全德は天理にあらざるなし、而も人欲に壞れざる能はず。故に仁を爲す者必ず以て私欲に勝ちて禮に復るあらば則ち事皆天理にして本心の德復た我に全し。

といふ事である。ここで私欲といふことも本心の全德より問題にされてゐる私欲であつて淺く簡單なものではないことも知られる。而してこの本心の全德は徒らに高遠なことではなく、却つて「天理の節文」たる禮に復ることをその內容とするものである。されば私欲は非禮の處といふことになる。顏淵が「請ふ其の目を問ふ。」と孔子の言葉に默契心融しつつ問うたのに對して、孔子が「非禮視る勿れ云々。」と卑近な視聽言動に關して敎へたのは、本心の全德の已む能はざるはたらきは心身洞然として一なるに基くのであつて、これを集註には「日用の間、天理の流行にあらざるなし」と言ふ。而してこれを他の觀點よりみれば、「勿れ」との禁止の辭に於て「人心の主となりて私に勝ちて禮に復る所以の機」（集註）を看取するのである。卽ち最も具體的な視聽言動に於ける修爲に本心の全德のはたらきを活き活きと看るのである。以上を綜合して集註には程子の語、「中に由りて外に應ず。外に制するは其の中を養ふ所以なり。」を引き、更には視聽言動の四箴を引用し、此の章の意の發明に委曲を盡してゐるのである。語類にも克己復禮は「規模大にして、精粗本末一齊に該貫して這裏に在り。」と言つてゐる。かくて克己復禮の重き所以を知り得た。ここで再びこの章の問答に就いて看れば、顏淵が「請ふ其の目を問はん。」と言つたのは、「天理人欲の際、已に判然たり」し故であり、「請ふ斯の語を事とせん。」と言つたのは、「其の理を默識し、又自ら其の力の以て之に勝つあるを知り、故に直に以て己が任と爲して疑はなかつた。」（集註）のである。これ「至を知つて之に至り、終を知つて

之を終ふ」（易乾卦文言傳）の明且つ剛であつて、「至明にして其の幾を察し、至健にして其の決を致す」所以である。この至明且つ至健は乾道であり、この乾道に專らであつたのが孔子である。而してこの事は川上章の嘆に最もよくあらはれてゐるのである。

七

「子川上に在りて曰く、逝く者は斯の如きか、晝夜を舍かず。」（子罕篇）の章には孔子の深い詠嘆の響が籠つてゐて、そこに全的な直觀が活き活きとはたらき、それを母胎として集註の「道體」の說が展開されたのである。

「晝夜を舍かず、」「一息の停るなく、」「常々相續して間斷せざる」川流に嘆じたのは、實は「逝く者」全體即ち天地の造化を嘆じたのである。これ即ち深い詠嘆に籠る全的な直觀であつて、集註の冒頭に、

天地の化、往く者は過ぎ、來る者は續き、一息の停るなし。乃ち道體の本然なり。

と言つたのは、この全的な直觀に哲學的省察を加へたものである。集註には更に程子の語、

此は道體なり。天運りて已まず、日往けば則ち月來り、寒往けば則ち暑來る、水流れて息まず、物生じて窮らず、皆道と體を爲して、晝夜に運りて未だ嘗つて已まざるなり。

を引いてゐる。かくて天地の造化の全的な體認が、道體之本然・道體・與道爲體といふ語で表はされてゐるが、これは前節の所謂「乾道」である。ここに孔子の眞精神に觸れるべき途が開かれてゐることを知るのである。

さて、一刻の間斷なく流れる川流は、一貫して至健なる運行に對する眼（活眼・常醒々の眼）を開いてくれる。川流は「指すべくして見易きもの」であるが、活眼を開けば眼前の世界に至つて健かなる天地の運行を隨處に認め得るのである。天理流行とはこの境地をいふものに外ならず、これは又形而上の世界なのである。而も道體の體認は一貫するもの、無窮なるものといふだけでは盡されない。（ここに止れば夫の會點の見處に類する。）ここに於て程子の「與道爲體」の語が深く親切な意義あるを知るのである。語類（三十六）に、

道と體を爲すの體は那の道の親切なる底の骨子を說き出す。恐らくは、人、物は自ら物、道は自ら道と說かんことを。所以に物を指して以て道を見はす。其の實は這の許多の物事湊合し來れば便ち都べて是れ道の體便ち這の許多の物の上に在り。只是れ水上較々親切にして見易し。

かくて、物によつて無形にして見得ぬ道が如實となり、

一面、道によつて物の理が顯はとなつて、ここに調和條理の世界が開けて來るのである。この際注意すべきは、物とは一息の間斷なき造化運行（卽ち一氣流行）の物である。かかる物でなければ「道と體を爲す」ことは出來ないのである。而して道體は「道と體を爲す」との體認によつて捉へ得るのであるが、なほ嚴密に言へば「物生じ水流るるは道の體にあらず、乃ち道と體を爲すなり。」（語類三十六）である。道體と言へば純粹な形而上のもの卽ち天理そのものであつて、「與道爲體」は間斷なき運行に於て「道體」を認めること卽ち天理流行である。「道體の本然」と言へば「本末精粗を連ねて較々闊く」本來的なるもの永遠的な相の下に現實の諸相を看るのである。語類に

如今箇の大原を識り得了らば、便ち事々物々都べて本根上より發し出で來るを見ん。

といふのは、この「道體の本然」の境地を指してのことである。（川上章の集註に道體と言つて天理と言はぬのは、川上章が孔子の眞意を直顯した重い章であるからであらう。集註に道體が見えるのは他に顏淵喟然歎曰の章（子罕篇）に引いた胡氏の言葉の中のみであるが、この場合は此の川上章の如く深刻な省察ではない。）

道體の體認は「活眼」を開くことであり、「純にして已まざる」心を持つことをも言へる。而して純にして已まざる心とは「動くに天を以てするのみ」（一貫章集註）であり、「天德」を有すること（川上章集註）、又「聖人の一動一靜、妙道精義の發にあらざるなし、亦天のみ」（陽貨篇、予欲無言章の集註）といふ事でもある。かかる聖人の心には顏淵問仁章に於ける克己復禮といふ事は問題とならず、常に本心の全德の顯現である。克己卽ち私欲に克つまでもなくその心は純であり、禮に復るまでもなくその一動一靜は道體の本然のままなのである。この境地より說かるべき工夫は「時々省察して毫髮の間斷なき」こと、卽ち「謹獨」である。謹獨とは自己の心が最も純にして已まざる工夫である。川流の嘆から道體・謹獨を體認した程子の眼光の鋭さには驚される。（程朱學の敬の說の重要な根據がここにある。）謹獨とは自己の深き內面に於て天行の健なる如き純として已まざる心を體認することなのであるが、語類には又朱子の深い思索を載せてゐる。曰く、

此の章を說くに因つて（先生門人に）問ひて曰く、今知らず、吾の心と天地の化とは是れ兩箇の物事なるか是れ一箇の物事なるか。公且に思量せよ。（先生）良久しくして曰く、今諸公書を讀む、只是れ文義を理會し得て更に意を理會し得去らず。聖人の言語は只是れ

這箇の道理を發明す。這箇の道理、吾が身也た裏面に在り、萬物も亦裏面に在り、天地も亦裏面に在り。通同して（吾が身と萬物と天地とは）只是れ一箇の物事にして障蔽なく遮礙なし。（故に）吾の心は卽ち天地の心、聖人は川の流なり。便ち也た是れ此の理往くとして極致にあらざるなきを見得たり。但天命は至つて正しくして人心は便ち邪なり。天命は至つて公にして人心は便ち私なり。天命は至つて大にして人心は便ち小なり。所以に天地と相似ず。今學を講ずるは便ち天地と相似ざる處を去り得んことを要して、天地と相似んことも要す。

吾が身と萬物と天地とが一であり、吾が心卽天地の心、聖人卽川の流といふのは、「此の理の往くとして極致にあらざるなき」故、換言すれば「道體の本然」の故である。これは聖人の境地に外ならず、而してかかる境地に裏附けられた「謹獨」は最も高明にして根本的である。卽ち天命と人心の對比、天地との似・不似よりする謹獨の論は一貫章の忠恕、顏淵問仁章の克己復禮に相應じつつ、自ら高明なる趣を持つてゐると言へよう。「人多く獨處に於て間斷す。」（語類三十六）の語も最も卑近なる如くであるが、以上の如き高明の境地から見れば意義深い箴言、深刻な工夫の語となるのである。

以上、忠恕・克己復禮・謹獨は曾子・顏子・孔子の修爲なり體認なりに於て深い意味を持つものであることを知つた。一貫章にては「聖人の心、渾然たる一理にして泛く應じ曲さに當る。」と言ひ、問仁章にては「心の全德、天理にあらざるなし。」と言ひ、川上章にては「聖人の心純にして已まず。」と朱子は注してゐる。而してかかる心を持つは「天德」（川上章集註）を有することであり、「動くに天を以てする」（一貫章集註）ことであり、更には日常の事物は皆「天理の流行にあらざるなき」（問仁章集註）こととなるのである。これを朱子は又次の如く言つてゐる、

聖人の心は直に是れ表裏精粗照徹せざるなし。其の思ふ所あるに方つては都べて是れ這裏より流出す。所謂德盛に仁熟し、心の欲する所に從つて矩を踰へず、莊子の所謂人貌にして天なり。蓋し形骸は是れ人、其の實は是れ一塊の天理なり。又焉んぞ得て樂まざらんや（語類三十一）。

これ孔子の眞精神を最もよく道破した言葉と言ひ得るであらう。天理流行とか本心の全德とかの語が集註にも處々に出て來て、その箇處は注意して讀むべきであるが、それは右の三章如き深き意味を理解した上でなければ孔子の眞精神を捉へることは難しいであらう。又徒らに天

理流行といふ如き高遠な境地を想見するのみであれば、工夫疎略・狂妄となるを免れず、曾點の亞流と墮し去るであらう。若しよく上の三章の意を解し得たならば、集註に天理流行・本心の全德を言はぬ諸章に於ても、天理流行・本心の全德の顯現を看取し得るであらう。そして顏淵が孔子の言を聞いて說ばざるなく、その意を發した如くなり得よう。

なほ、孔子の深いこころが顯はとなつた場合として、論語に命・天命を言つた諸章を考へねばならぬ。「君子固より窮す。」（衞靈公篇）と孔子は言つたが、否定に逢つて孔子の心はより純に、より深くなつた。「天を怨みず、人を尤めず、下學して上達す。我を知る者は其れ天か。」（憲問篇）と孔子は言つた。これに就いて朱子は「深く其の語意を味へば則ち其の中自ら人知るに及ばずして天獨り知るの妙あり。」（集註）と言つてゐる。蓋し孔子の命に就いての眞意は最も窺ひ難いものであらうが、この朱子の語は「命」の祕義をよく解くものと言ひ得よう。「天獨り知る」の前に「已獨り知る」の境地がある筈であるが、否定に逢つていよいよ純になる心には「已獨り知る」の上に「天獨り知る」といふ境地が開けるのである。これは「已獨り知る」の知るに何かが加はるのではなく、「已獨り知る」境地が徹底し、絕對的となるのである。換言すれば安んじ、人事を超える境地となる。而して「已獨り知る」は謹獨の意であるから（大學及び中庸章句の愼獨の註に出づ）、命・天命の考も上述川上章の謹獨が否定を經て純に深まつたものと解することも出來よう。而して若し謹獨による「已獨り知る」の境地（天理・道體を體認する境地）が透徹してゐなければ、否定に逢つての「天獨り知る」の考は不純とならざるを得ず、隨つて天命を樂しむことは出來ないのである。かくて孔子の命の說は容易に得て聞くべからざるものと言はねばならない。命に就いてはなほ種々考察すべきであるが、今は本論述の中心點に關連せしめた以上の如き解釋に止めてをく。